

社会とつながり、
心豊かに



女性大学

— 令和6年度 第1期 えるのす連続講座 —

開催
報告

5/28
(火)



心地よい爽やかな風と春の陽気を感じる季節を迎えた5月28日、令和6年度第1期えるのす連続講座～女性大学～が開講しました。第1講目は25年間で70回以上パレスチナを訪れているジャーナリストの小田切拓氏をお迎えし、「パレスチナ、ガザとの25年」というテーマでお話しいただきました。パレスチナ問題をわかりやすく解説するといった内容ではなく、報道だけでは知ることのできないガザ地区の現状を、そこに住む「人」にフォーカスを当てて伝えていく展開がとても印象的な講義でした。これを機に、この問題について一緒に考え、話し合う場が広がっていくことを期待したいと思います。

6/4
(火)



第2講目は北海道大学大学院理学研究院の塚本尚義教授をお迎えしました。塚本教授にご登壇いただくのは実は今回で2回目。今回は「日本の最近の惑星・月探査～はやぶさ・はやぶさ2・SLIM～」と題し、各探査機が成し遂げた人類初の快挙とその舞台裏を映像とともにわかりやすく解説いただきました。惑星によって着陸・探査するための条件が異なるため、探査機もすべて同じというわけにはいきません。「太陽系の起源を知る」というミッションは、はやぶさ・はやぶさ2に委ねられ、「月の起源を知る」というミッションはSLIMに委ねられています。まだまだ謎の多い宇宙について、今回学んだ内容をもとに今後も注目していきたいと思いました。

6/11
(火)



第3講目は北海道大学大学院文学研究院の押野武志教授をお迎えし、「宮沢賢治の詩の世界」をテーマに時間の許す限り、賢治の残した沢山の詩に触れました。幼少期に「銀河鉄道の夜」や「注文の多い料理店」などといった賢治の童話に触れる機会は誰しも一度はあったのではないのでしょうか。今回はあえて童話ではなく、賢治の詩の世界に焦点を当てました。わからないことをわからないまま、思いのままに表現するのが宮沢賢治の詩の特徴。方言やオノマトペ、エスペラント語や仏教用語等を駆使した文体は理解しようと試みても難解なケースが多く、押野教授はその「わからなさ」を楽しんで、とアドバイスをくださいました。

6/18
(火)



第4講目は当協会の法律相談員としてもご協力いただいている弁護士の上岡由紀子氏をお迎えし、「終活を考える～後見や遺言を中心に～」をテーマに、自分や家族が万が一の時に心づもりができるような制度や遺言書の作り方などやさしく解説していただきました。終活を希望や笑顔に満ちたものにするために、どんなことをしておくとういよか、また進めていく上で浮かび上がることが想定される不安材料の解決方法など、弁護士の視点で具体的にお話しいただいたことで、受講者も自分がどうしたいか？自分の気持ちを整理しながら学ぶことができました。年齢を問わず、元気なうちにできることを考えるきっかけとなり大変有意義な時間でした。

7/2
(火)



第5講目は、日本医療大学総合福祉学部の林美枝子教授をお迎えし、「その後～ではない北海道の萩野吟子」と題して北海道に縁のある吟子の足跡をたどりました。吟子は、女性が医術開業試験の受験を許されていなかった時代に様々な困難を克服して日本で最初の公認女性医師となった人物であり、女性の地位向上や衛生知識の普及にも大きく貢献しました。明治期の著名な女性の一として名を連ねた吟子でしたが、志方之善と再婚し、北海道に入植すると吟子の活躍は語られることがなくなりました。本講義では、北海道各所の吟子の足跡をたどりながら、今もどこかで眠る吟子の記録を追い求めるという新しいスタイルで展開し、吟子のことをもっと知りたいという余韻を残す2時間となりました。

主催 公益財団法人 北海道女性協会
後援 北海道・札幌市

社会とつながり、
心豊かに



女性大学

— 令和6年度 第1期 えるのす連続講座 —

開催
報告

7/9
(火)



第6講目は「日本の医療制度はこれからどうなるのだろう」をテーマに、北星学園大学社会福祉学部の安部雅仁教授にお話しいただきました。講義では、これまでの医療制度の成果と現代における課題、今後の方向について、新しい動向を整理しながら学びました。日本では1961年に「国民皆保険」が導入され、長寿社会や長い健康寿命、低い乳児死亡率といった点で一定の成果が得られており、海外からも高く評価されていますが、少子高齢化が進む現代においては、医療費が増加して制度の持続可能性を低下させる要因になっています。日本経済の低迷が続く中、すべての国民が今後も安心して医療を受けられるためには何が必要かを考えるきっかけとなる講義でした。

7/16
(火)



第7講目は北海道新聞社論説主幹の蛭川隆介氏をお迎えし「現在（いま）を知る」をテーマに世の中の動きや出来事を読み解き考えました。女性大学の講師として毎期に渡り、国内外問わず旬な話題をお届けして下さる論説委員室の皆さん。今回は昨年度の受講生からのリクエストに応じ、「卓上四季」について、過去の記事にも触れながら執筆の裏側を知ることができました。講義の後半は第2部として、前回の続きとなる「政治とカネ」の問題について、過去の経緯を振り返りながら現代における不透明な政局の行方を考えました。30年前に掲げられた「お金のかからない政治」の実現は一体いつになるのでしょうか。

7/23
(火)



第8講目は「歩いて身も心もリフレッシュ-フットパスのすすめ-」と題し、エコ・ネットワーク代表の小川嵐氏をお迎えしました。フットパスはただ歩くということではなく、多様な目的を持った活動で、その地域の歴史や文化、自然などと触れあったり、農・食・地域産業を知る、また人とのコミュニケーションを歩きながら楽しめます。本講義では、本場イギリスのフットパスの歴史に触れ、実際に何度も現地を訪れたことのある小川さんのお話を写真とともに楽しみました。フットパスの魅力を北海道に持ち帰り、今では冬も含め年間100回以上のウォークイベントを開催している小川さん。御年79歳のパワフルな小川さんに圧倒された2時間でした。

7/30
(火)



春から始まった第1期女性大学も残すところ2回となった第9講目は「韓国映画・ドラマで知る韓国社会」と題し、韓国語講師・韓日翻訳の芳賀恵氏をお迎えして、映画やドラマが反映する韓国社会について学びました。日本では20年前、ドラマをきっかけに韓流ブームが起こり、若者の間ではK-POP音楽が流行る等、韓国が身近な存在となりました。韓国における社会問題や歴史観がどのように映画やドラマに反映されているのか、具体的な作品名をご紹介いただきながら解説していただいたことで、今まで触れたことのない作品の魅力を知るきっかけにもなりました。後半では、日本よりも深刻な少子化の問題やジェンダーの歴史にも触れ、受講生からも積極的な質問が相次ぎました。

8/6
(火)



最終回となる第10講目は「狩猟する女性たち-狩猟採集文化における性的役割分担を再考する-」と題し、北海道大学大学院文学研究院の山口未花子教授にお話しいただきました。狩猟採集を通じた自然と人との繋がりを研究するため、カナダのユーコン準州に毎年足を運んでいるという山口教授。狩猟採集社会において、近年の研究から見てきたことについてわかりやすく解説していただきました。これまで「狩猟は男性、採集は女性」とされてきましたが、山口教授によると実際には女性も積極的に狩りをするそうです。そこにはアンコンシャス・バイアス（性別による無意識の思い込み）が働いている可能性も否めず、様々な属性を持つ研究者による見解に耳を傾けることが重要であると学びました。